

比較鑑賞法における美的感受、解釈、価値判断—クロード・モネ作『散歩、日傘をさす女』とエミール・クラウス作『昼休み』を対比させて—

立原慶一

本稿は、実践的方法論に隠されている因果と論理の関係を明らかにする手法で、二つの比較鑑賞法のいくつかの局面における有効性と限界を対比的に問題にする。主副比較鑑賞法と対置比較鑑賞法を生徒に対して試みてきたが、フィードバック鑑賞が一律的に組み込まれているところに、両方法論に共通する原理的な特徴が認められる。方法論的な違いは二作品が主副関係として設定されるのか、それとも対置関係にあるのかに求められる。

第一章では、第一にフィードバック方式によって追加される美的感受体験が、より豊かになされる方法論は一体どちらかの方であるのか、第二に生徒がいずれの作品を好むのかという、作品の嗜好性と美的感受体験の増加率及び鑑賞能力との関係、第三に造形性単独、造形性と生活感情の重複型、生活感情単独それぞれに関わる美的特性感受の実態を捉え、両方法論の優劣を実践的に究明するべく、それらに美的特性感受の回数という物差しを適用した。第四に以上三つの調査項目毎に、美的感受の増加率を方法論の違いという観点から、対比させ優劣を見極めた。主副比較鑑賞法は、マイケル・J・パーソンズ鑑賞能力論における第三段階内の営為を、そして対置比較鑑賞法は、同第二段階内の営為をそれぞれ充実させる。そうした働きの違いを見せていることが分かった。

第二章では、対置比較鑑賞法と主副比較鑑賞法それぞれの場合にあって、作品の解釈と価値判断の中身がフィードバック方式によってもとより達成されるが、とくに教育効果の差違的な様相に着目した。すなわち質的統一をにらみながら類的特性のあり方を検討する、という類型化による考察が試みられた。

対置比較鑑賞法は、基本的に大多数の生徒（約7割）に解釈行為を推進させるが、それ以上に価値判断を全体の過半数以上に行わせる点にこそ、方法論的な特徴が認められた。それは解釈以上に高いレベルにあり、中学校学習指導要領美術編が一連の鑑賞活動の最終段階に要請しているものなのである。それらの営みをおおむね全うさせることが判明した。それに対して主副比較鑑賞法は前者に比べて、いずれにおいても教育効果は高くなかった。

実践的方法論としての有効性をここでまとめてみると、一方の美的感受体験については主副比較鑑賞法の方がより多く達成させるが、他方の解釈と価値判断に関しては対置比較鑑賞法の方がより促進させる、という知見が得られた。